

「自力を尽くした果てに見えてくる愚かな者の救いの道」

細川 巖 先生

平成十一年四月十三日之五〇六宗教の時間 放送

（「自力を尽くした果てに見えてくる愚かな者の救いの道」についてお話し頂きます。聞き手は金光寿郎さんです。）

金光 細川先生は、福岡教育大学では化学を教えていらっしやっただけですか。

細川 そうでございませぬ。化学もいろいろありますけれども、初めは分析化学ですね。専門としましては地球化学とあって、色々の元素が同位化しておる状態を、特に川から泥やその他の粘土が流れ込んだ時に、どういうふうに分布が変わって行くだろうかという研究が主な仕事でして、まあ小さな分野ですが・・・

金光 そうすると、広島で化学の勉強をなさっていた頃、仏法へのお近付きの機会がおありになったんでしょうか。

細川 ええ、私が学生の時には、金子先生とかがおられました、講義は聞かせていただいたものの、単に一聴講生でし

てです、化学の方が主で、そちらの方はほとんど講義を受けたというだけでした。実際は、大学に入りました昭和十四年でしたか、二年生の時に、厚生省と文部省が身体の弱い学生を集めて、健民修練所とあって特別に米とか栄養を補強しまして、寮を作って団体的な訓練をするようなことが徐々に出来たわけですね。私は指導学生ということで世話を頼まれてまして、その会場と申しますか、寮になる所を探したんですが、いろいろ探しましたが、その探した所が、たまたま浄土真宗に属する所だったので、どこか迷ったかなというわけであつたんです。

金光 ではその後、その寮を探してる時に借りられた所が、そういう仏教に属する所という、それが機縁で：

細川 はいそうでした。初めは学生課の人が紹介してくれた禅宗の大きなお寺でございまして、これは国泰寺という浅野候の菩提寺とかいうお寺でした。でもあまり暗くて、もう少し明るい所はないかと探したのです。郊外の方に真宗の共同会館がありまして、ここなら見晴らしもよいし、ここにお願いしようとなつたわけで、本当に偶然でした。

金光 その都合所で、学生さんたちと一緒に生活をなさりながら、仏法を聞くチャンスもおありだったわけですね。

細川 そうでございます。そこで学生が二十人ほど、指導学生が二名ついて、朝は散歩をしたり、百二十四代の天皇の名前を一緒に唱えたりしました。しかし、何せそこは会館ですから、朝晩勤行があるわけですね。「希望者は勤行に出てもいい」と言ったのですが、誰も出席者がいなくて、私は学生の世話をする責任者であるものですから、やむを得ず代表で勤行に出たり、お話を聞くようになったのです。そういう様な発端でございます。

金光 それでは、最初は聞こうと思うよりも、右代表で、結果として聞かれたという：

細川 そうなんです、他に聞く人があれば聞かなくてよかったですけども、誰もあんまり行かんんですから、会館の方にも体裁が悪くてですね、そういう所でございます。

金光 そこでお話聞いていらつしやると、それまでの生活とはやはり何か違った響きがあった、ということでしょうか？

細川 はい。もう全然今までそういうふうな知識が無かったのです。しかしその先生が、我々の学生に非常に分かり易い表現でお話をされるのです。例えば「真実のみが末通る」とか、「念願は人格を決定する」とかいう様なことを言われたもんですから、なるほどという所がありまして、これはしっかりと聞きたいと思っただけです。

そして、それが三カ月終わりました時に、丁度十二月の「報恩講」がありまして、私も忙しかったんですが、この「報恩講」というのに一度出て、言わば最後の仕上げと言ったらおかしいですが、聞かせて頂こうという気を起こして、朝から晩まで聞いていました。一週間、とうとう最後まで聞きました。それが、源信和尚というお話で「大悲もの憂きことなくして、常にわが身を照らしたもう」という、それが非常に大きな感銘でしたですね。それが、これは一つ聞きたいな、という出発点になりましたね。

金光 その「大悲もの憂きことなくして、常に我れを照らしたもう」ということですが、日頃はそういうことになかなか気が付きませんか？

細川 ええ、それはやはり一時の感銘でしたけれども、それが出発点になって、更に聞きたいという心が起こって、それからだんだんと親鸞聖人の教えの中心、極重悪人唯称仏とかそういうのを聞いておるうちに、少しずつ分かって、大学を出ました時に、もう一つしっかり聞きたいと思うたわけでございます。

それで、大学を出た時は昭和十八年で、太平洋戦争の終わり頃ですけども、化学科の出身ですから、技術将校とか海軍の方の特別のポストがありまして、それを志願すれば半年で中尉になれるとか、海軍兵学校の教官とかがあつて、直接戦争に行かなくて済んだんですけども、私はそういうのはい

やで、広島師範学校に就職したわけです。そこですぐ召集されました。けれど、まあどういわけか即日帰されて、結局、学校の先生を作る師範学校の教官として、就職を続けることが出来たわけです。

金光 そうすると、教えながら、また仏法の方も聞かれたという・：

細川 ええ、その会館の方に卒業と同時に住み込みまして、そこにおりながら師範学校で教え、帰って来ては仏法を聞くというようなことができました。

金光 最初の一週間続けて開法されたということですが、これは、時々読むあるいは時々話を聞くというのと、一週間続けるというのとは随分違うようでございますが：

細川 はい。これはもう寝食を共にするというところで、そこでやっておられます同行の人とか、そういう人と生活を共にしますし、講義があつて、座談会があつて、質疑応答があり、それからまた、講義があつて、座談会がある。その間にはそういう色々な人との話し合いがあるんですね。従つて、聞法というのは、一応耳から聞き、目で読むということですが、それだけでなく、毛穴仏法と申しますか、雰囲気の中から教えられるものがありまして、そういうものが一週間続きますから、大変な集中講義でありましたですね。

金光 そういうことが気になっていらつしやったものだから、じゃあ師範学校で教えられるようになって、又もう一度会館で生活なさる・：

細川 左様でございますが、反対に、もう一辺仏法を聞きたいから、師範学校に就職してそのまま会館におつた、というのが本当でございます。

金光 形で聞法を続けていらつしやいますと、言葉としては色々な言葉を聞かれますし、こういうことだろうというふうなことは段々分かつて来るわけですけども、なかなかそれだからと言つて、頭の中での理解を生活で味わうという所へ行くまでは、これは随分暇がかかるのが普通の様でございますが、どうでございますか。

細川 はい。その通りですね。私も初めはそういうふうに熱中しておりましたけれども、一年経ち二年経ち三年経つうちに、だんだんマンネリ化しまして、先生が話されることが結局同じことをくり返しておられるような気がして、もう何か砂漠の中をこうトボトボ歩くような、何となく味気ない気持ちになつて、これはどうしたらいいかなと思つて先生に「先生、私はかつての感激はもうなくなつて、どうにも今は砂を噛むような思ひです」と申しあげたら、先生は私の方をじーつと見て、「それは非常に大事なことで、『歎異抄』の第

九章の、いわゆる『念仏申し候えども踊躍歡喜の心が無い』という、その唯円の問いが、君の問いなんだ」「それは、すぐに解決しようとせずに、一生それを背負って、続けて聞いて行きなさい」と言っただけです。それで、なるほどと思いました。

けれど、それでもやっぱり解決がつかないものですから、注意して聞いておきますと、結局私は積極性が無いというか、その会館におればお話を聞けるわけで、言わば恵まれた環境の中で聞いておるわけであって、自分から積極的に、例えばあの有名な雪山童子のように、身を捨てて聞くというような所が欠けておったんだなあというように気が付いたわけです。

先生は時々、遠い所にお話に行かれておりました。それで島根県とか山口県とかに会座がある時に、思い切っただけに行ってみました。それがやはりよかったですね。今度は違った環境で、ちがった人達と一緒に聞いて、非常に受け取る所がありました。その地方の方達の一生懸命仏法を求めておられる姿を見て、そういうのがだんだんきつかけになりましたですね。

金光 でも、恐らく先生のお話は、広島でお聞きになつていらつしやつた内容とそんなに違う内容ではないお話だろうと思います。伝える方の姿勢とか態度とか雰囲気とかそういうもので、何かまた違った新鮮さというもの、違った感じもお受けになるわけでしょう？

細川 そうなんです。結局、教えと一緒に聞いて、それを実行している人達があつて、そういう人達が非常に喜び、感想を言い、次もすっかり聞きたいというように、そういう生活に染み込んだ実状を見てですね、自分は観念的に聞いておったということが知らされると共に、ああいう生き方できやならんという励みも与えて頂いたと思います。

金光 確かに、自分の頭で考えて、頭で理解していた仏法が、生活の中におりてくるのが大事ですね。

細川 全くその通りです。私の場合を振り返ってみますと、自分にとって悲しいとか悔しい事件に会ってみて、その時にずっと前に聞いておった教えが生きて来たと言いますか、なるほどそうだったのかと感ずる時がありました。

その一つは、私は昭和二十四年に福岡方面に引き上げて、福岡師範(第一師範と申します)に帰って来ました。これが福岡学芸大学になったわけですが、そこでは今までのような恵まれた状態ではなく、多少とも苦労しました。

しかし逆にこれがよかったですね。先ず、福岡市に帰って来れるものと思つたところが、久留米市にある分校の方に勤務になりました。非常に遠い所に行きまして、更に今まで教授だったのが、教授は福岡にポストがあるわけで、助教で帰って来ざるを得ませんでした。久留米分校も学校が兵舎の跡でして、もう化学の実験施設も何にも無く、メモ用紙一つ

作るにも自分で作らなければならぬ、そんな苦勞をしました。それがやはり何と言いますか、念仏を申すという、自分の内面から念仏申さざるを得なくなるような場合に会っています、そういう現実が非常によかったと思えますね。

金光 法を聞く場合には、やはり自分で自分を知らることが人間はどうも出来にくいように出来ているわけでございますが、そういう現実の色々な新しい環境、殊に苦勞の伴う環境に行つて、嫌が上でも自分というものを知らされるといふか、そういうことになるのでしょうか。

細川 はい、そういうものです。これは自分のことでないので申しわけないですが、親鸞聖人という方を考えてみましても、やはり二十九歳から三十五歳まで、吉水で法然上人の教えを受けておられた、頭のすごい方ですから、もう全部吸収されたんだと思います。そこでは色々な言い争いとかディスカッションもあつたようですけれども、やはり越後に流された三十五歳からの五年間のご苦勞というものが本当に骨身に染みて、仏法を体解されたんだと思うんですね。ですから、何と言いますか、聞いて分かつた、それを聞解とすれば、体で分かつたという体解が生れるためには、自ずからその時期があるのではないかと思えますね。私には、久留米時代の苦勞がその時期にあたつたわけで、非常によかったと思う次第です。

金光 そういう時期に、これまでお聞きになつた言葉なり、あるいは教えなりが非常に新しい意味、新しい力を持つて分かつて来ると言いますか、そういうこともあるわけでございますか。

細川 そうでございます。それで私もその後、毎年一回一週間の講習会に出たり、あるいはそこでもう一辺しつかり聞き直して行くというのをずっと自分で続けました。

もう一つ、学校の中で会を開きまして、これまで自分の聞いたことを材料にしながら話をしてみたんです。話をしてみると、分らん所が沢山出て来て、それを考えざるを得ないと言いますか、単に聞くだけでなしに本も読まなきゃならんということが起こつてきました。その様な話す機会というのは非常にいいですね。考えさせられましたですね。

金光 こういうものとある程度分かつた気持ちになつても、それを言葉に出してみると、表現出来ない所とか、どうしても言葉にならない所が、これはやつぱりこの所を何とか言葉に出して伝えてあげたいという、そういう所に段々気が付いて来るといふことが・・・。

細川 左様でございますね。初めにお話をしまして、その後必ず座談会をやつて質疑応答をしました時に、私の了解の曖昧な所が質問になるわけなんです。そしてそれが上手く言えないわけなんです。そういう言葉は抽象的で観念的で、相

手が納得出来ないし、自分自身が先ずやはり分かっているというのが分かりましたですね。そして段々と、課題と申しますか、問題点というのをはっきりして来たというのが大きかったと思います。私には会を開いて聞いてくれる学生がおったということが自分自身のためになったなあと、今感謝してますですね。

金光 その頃の若い人遠から質問されたことで、それは恐らく現代でも若い人が疑問に思うことと共通点というのがいくつかあるんじゃないかと思いますが、何かその時に問題になったようなことで、ご記憶にあることがあれば・・・

細川 そうですね。大体、昭和二十年代の初めからその終わり頃までは、何と云ってもこの戦争の余波の残った頃で、言わば否応なく日本の伝統と言いますか、日本は神国なりとか、そういうふうな考え方というものが崩れてしまつて、どこに本当のことがあるのかという、真実と言えるものがあるのかというのが、やはり一つ大きく疑問と言いますか、知りたいというものだったですね。

一方、哲学の方にも危ない思想があるし、教育学の方でも色々な思想がありまして、それが正しいのか、それでいいのか、本当なのか、というような疑問ですね。そういうものをぶつけられたですね。私はそういうものは詳しくないんですけども。

一般論は、それはそれとして、一つ歴史の中で親鸞という人だけは信頼出来る人だと思ふし、直接親鸞の教えを聞いてみようじゃないかというような行き方で、仏教がどうか、浄土真宗がどうかじゃなしに、親鸞という人をつ尋ねてみたいということで方向がはっきりしたと思います。

金光 その場合、やはり『歎異抄』を頂いた：

細川 はい『歎異抄』はもちろん中心でした。そして随分と長くやりました。『歎異抄』もなかなか第一章というのが難しく、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて・・・」、あれはね、どうしてもうまく話せない、自分にぴたつと来ないのですね。そこで第二章の「おのおの十余力国の境を越えて尋ね来らしめたもう」という、それと三章とかですね、そこから辺を話しておいて、一章は大体後回しにしまして、その分を歴史とか色々あれば話し易いので話していました。

金光 『誓願』とか『本願』これはもうすべてですから。

細川 はい、それはもうとても大変なものです。私は化学をやっておりますから、宗教に関係があるかという、まあなと言いたい所ですけども、ただ一つ、化学をやりますと曖昧さというのが許されないのでね。

自分で分かったことがすべてであつて、例え他人が言つていても、分からんことはどうしようもないわけで、いわゆる

実証と言いますか、自分の手の上で実際に出来ることでないと確実に言わないし、言えないという、そういう学科の性質で、分かんことは言えませんでした。

で、とうとう浄土とか本願とかをお話する機会は、もうずーつと後になりました。とうとう何年か前までよく分かんかったのは「宿業」という言葉でしたね。これが分かりませんでした。それで、こういう言葉は使わんことにしました。しかし、その分、これは「現実」ということを言つとるんじゃないかと思つて、「現実」 Ⅱ 「私の、現在の、このどうしようもない現前の事実」と、これを仏法では宿業と言うのではなからうか、というような気がしていました。しかし、分かんことは言わんことにしていましたですね。

金光 そうすると、仏法の場合は理解する自分自身が問題になるとしてはいますが、化学だと、自分は置いといて、自分が実証出来る、自分が実験出来てこの通りに違いないと確信する、その様な科学的な確信というのが生まれて来ると思っています。

しかし仏法の場合は、そういうことを考えている自分自身が問題になって来た時には、自分だけの力ではどうにもしようがないという時があるのでございますね。

細川 これはやはり自分の善知識（先生）がおりまして、先生の言われたことをくり返しくり返し読み返して、先生のそうおっしゃっておった表情、その言葉の内容、そういうもの

からずーつと考えてみて、それがやはり表面的な理解だけでは許されなくて、どうしても自分自身を顧みざるを得ない、どうしても自分自身が家庭を持ち、職業を持つておるのに、それがちつとも教えられた通りになつていないという、そういうふうな事実を顧みてくるというのが、段々段々と身に付きましたですね。教えられましたです。

金光 最初は、自分にまあ多少悪いところがあつてもそう悪くはない、というふうに思つてるのが、段々気が付いてみると、やはり自分が悪い。

細川 はい。十八願に「唯除五逆誹謗正法」といつて「ただ五逆と正法を誹謗せんとをば除かん」という箇所があります。その五逆というのは、つづめて言えば親殺しの恩知らずであり、誹謗正法というのは、如来を無視して如来を何とも思わないというような、そういうお粗末な人間だ、という。

それをどうしても他人のことだとか思えないわけなんですな。これは自分のことなんだつて言つて教えられたんだけど、どうしてもどうしても思えなくてですね。それも本当に長い時間がかかりました。もう何十年とかかりました。

金光 特に、自分の親を殺すなんてことはとんでもないと・・・

細川 はい。親孝行だと思つてましたですね。

金光 あれもしてやった、これもしてあげたとか、そんなことは覚えてますけれども・

細川 はい、それが分かったのは、もう五十歳を遠く過ぎて、六十歳近くになった頃じゃなかったでしょうか。そういう「唯除かれる存在」というのが自分だというのが分かったのは随分と後でした。

金光 でも、批判する人は、あるいは「唯除く」というのはそれだけ世界が狭いから除くんだ、本当なら除かないはずではないか」というふうに言う方もいらっしやるんですが、その所はどういうふうに受け止めておられるんでしょうか。

細川 はい。私にとってもそれは非常に問題で、蓬茨先生という方がおられました、もう亡くなられましたが、お尋ねしたことがあったんです。

「曇鸞大師や親鸞聖人は、第十八願をいただくに、必ずその後唯除五逆誹謗正法と付けられる。一方、善導大師とか法然上人なんかは、本願文を引かれる時には、その唯除五逆誹謗正法が載ってない。先生どっちでしょうか」と聞いてみましたら、蓬茨先生は、「曇鸞や親鸞という方は機の立場に立って、法を受ける立場に立って言われておる。善導や法然は、如来の立場に立って、法の立場に立って言われておる。如来から言えば除かれる者はいない。けれども、それを受け

る側から言えば除かれておる者が私なんだ。そのような自覚があるために、そういう違いが出来たんだ」という話をされました。

それぐらいでしたが、私はそれに本当に打たれて、なるほどそうだ、と思つて、それ以来非常にはつきりしたですね。

金光 そうしますと、自分が除かれてる者だということ、じゃあ駄目だと自分で思つてしまうということとは、違う世界で言われていることですね。

細川 やはり本願と申しますと、自分において認められる事実が、南無阿弥陀仏になるわけでございます。ですから「除かれた、本当にもう申し訳ない私である：南無阿弥陀仏」となつて、その除かれておる者が救われておるといふ、機法一体と申しますか、如来の光に照らされながら、しかも如来の中に抱かれておるといふ、大悲無倦常照我身であつて、その所が非常によく頂けました。

金光 そうしますと、自分がどう考えてももう除かれ、外されている人間に違いないんだけど、その自分が救われている、それでお念仏が出るという、そういうこととございませぬか。

細川 そうでございますね。南無阿弥陀仏という、このお念仏が与えられておつて、念仏が初めである、これもちよつと

分かり難い。けれども、念仏が一番最後になって南無阿弥陀仏になる所が、何と言いますか、「撰取不捨」ですね。

ですから、例えば夫婦喧嘩して、考えてみると長年仏法を聞いておる者が、こんなことでは本当に信心がないんじゃないかと言いたいですけれども、「こういう体たらくの私、南無阿弥陀仏」と、それが「南無阿弥陀仏」となっておさまるのですね。

金光 そういうふうに、全てがお念仏、「南無阿弥陀仏」という所に、先ほど「撰取不捨」とおっしゃいましたが、抱き取られているということは、これは何処まで行っても、そういう状況が、現実が、続くということでございますね。

細川 そうでございますね。

金光 そして、死んでから浄土へ行くとか、何か浄土というと遠い世界のように考えられる方が多いんですけども、ただ今のお念仏ということであれば、お浄土も決して遠い遙か向こうの世界ということではなくなるわけですね。

細川 そうでございますね。大体、往生浄土ということと往生成仏ということと、この二つを区別して考える必要があるというのを聞いております。

私もその通りだと思いますが、往生浄土と言えば、例えば卵が親鶏から暖められ孵化してヒヨコが出て来た。そこが往

生浄土の始まり。殻を破って、広い世界に出たんですね。始まりであって、そこからヒヨコがヒナになり、段々成長して行く。そして、とうとうそれが往生成仏して行く。そういう進展の過程がこの世であって、往生浄土とは、すなわち一步歩進んで行くプロセスであり、そして到達するところが涅槃、そこが命終わる所。こういうふうに考えますと、親鸞聖人の教えというのは往生浄土門、その教えであって、往生成仏門ではないと思うんです。その方が現実的ですね。現世・現生の事実を慶ばれたんだと思います。

金光 「往生浄土」というのは、この現生の世界でヒナが卵から出て来るように、浄土に生まれる慶びを現生で感じる事が出来るということだ：

細川 はい、そうでございますね。才市同行という方がおっしゃったという話ですけども、「才市、浄土は何処か。ここが浄土の南無阿弥陀仏」これは実に名言だと思っております。「ここが浄土の南無阿弥陀仏」「南無阿弥陀仏」じゃないと往生浄土にならないですね。そういう所はやはり非常に優れた同行ですね、この方は。

金光 その才市さんのことで思い出すのは、昔、もう三十年前になりますが、温泉津（ゆのつ）の才市さんが通っていたお寺で聞いたんですが、ある時、説法なさる方が、「この中に地獄に墮ちる者がいる」と言われたら、講壇の一番前にいた

人が手を挙げて、それが才市さんだったと。同じご講師の方がすぐ後で、「しかし、ここにお浄土に生まれて助けられる者がおるぞ」と言ったら、「はい」と言って、また手を挙げられた。だから、先ほどの「唯除」のお話と同じ様に、地獄に行くに違いない自分という自覚を持っていらつしやる方が、また同時に、お浄土で救われてる、救われる人間に違いないという、そういう自覚も持っていらつしやった。そのような話を聞いたのを、今ちよつと思ひ出しましたんですが・・・。

細川 京都の西田幾多郎という先生は「絶対矛盾の自己同一」と申されたそうですね。やはりそういう哲学の言葉で言うとうちに難しいんだけど、地獄に落ちることと浄土に生れるということとは絶対矛盾してるわけですね、それが私において南無阿弥陀仏で統一されているという所を、西田先生は言われたのかなと思つて、伺いましたですね。

金光 そういうふうには、自分の身体で味わう、体得するということになると、やはり聞く、聞いて聞いて聞き抜いて行かないと、頭で理屈で考えてはちよつとその辺の所は、なかなか分かり難いということではございませうか。

細川 左様でございませうね、やはり、そういうふうには勉強して行きます道行きというのは、初めは聞・思・修という様な聞いて、次は考えて、実行してゆく。実行というのはやはり聞法の他には無いんですね。毎日勤行をして、朝晩のお勤め

の時念仏を申すという、聞・思・修という段階がかなり長いかと思ふんです。

それを続けて、その間苦勞も色々して行くうちに、とうとう聞・信・称という、聞いたままだが領き、「有り難うございませう」になって、南無阿弥陀仏になるというのは、これは最後の段階と言いますからね。

それでまあ、人によつて違ふとは思いますが、簡単には行かないんだと思います。私自身はもう何十年とかかりました。それだけ打ち込めなかつたせいもあります、よく分らなかつたですね。考えてみると、やはり「自分は分かつた」、あるいは「分かる様にならなくてはいかん」というのも、如来のお力であつて果遂の誓いと申しますか、「聞法して続けて行く者を必ず分かる所まで進めたい。これを果たし遂げずば我正覚を取らじ」という第二十の願というのが、やはり本当は生きておつて、そのお陰だったなあと思つております。

「自分で努力して行けば・・・」と一時期考えましたが、そうではありませんでした。如来のお働きであつたな、と思つて感銘しています。ですから私は「継続一貫、最後までやり抜く。そして出来るだけ積極的にやり抜く」ということを続けて行くのが一番中心で、それさえあれば、誰でも皆そういう「仏法の慶びを知り、念仏の人になれる」と思つております。

金光　そういうお話を伺っておりますと、「浄土真宗の場合他力の教えだというふうに聞いていられるけれども、どうも自力ではないのか」という様に思われる方もおいでかと思えます。その辺の所は如何でございましょうか？

細川　そういうふうに、いわゆる他力と自力が並んであって、「他力の方は易しい。自力は難しい。だから自力を捨てて他力の方をとりなさい」という説き方は非常に曖昧です。そうではない。物事をやれば必ず自力でやるしかないわけであって、それが聞・思・修の段階ですね。従って、自力と他力が並んでおるといっても、自力の果てに他力が開けるのであって、自力を尽くさなければ他力は開かれない。これをはつきり言わなければいけない。

念仏にしましても「報謝の念仏でなければいけない。自力の念仏じゃ駄目だ。だから念仏してもつまらん」と言う。そんなものではない。自力の念仏を尽くした後、自分のそういう思い上がった考え方を照らし出されて、申し訳ない、というような時が必ず来るわけであって、自力の念仏をやっておかないと他力の念仏は出て来ないと思えますね。

金光　確かにその自力というものも、大きな他力の働きの中で出来ることであって、ということなんですけれども、しかし、その自力を尽くさないとそのことに気がつかない様に、どうも人間は出来ているようではございますね。

細川　そうでございます。ですから自力というのは、十九願とか二十願と申しまして、それも本願の中なんでしょうね。本願の世界にあっては、自力を尽くした者は、いわゆる浄土の一角に方便化土として迎え取られる。しかし本當は、それは方便の世界であって、他力の眞実の世界に出す道行きなんです。

従って、自力を捨ててはならない。十九願・二十願から出発しなければいけない。これを私は大学の仏教青年会で力説して、それで鍛えて来ました。それが学生にとってはよく分かる様で、彼等も他力は分からないですね。

金光　何か中途半端な他力の説明だと、現在一般に他力本願という言葉が間違つて使われている様に、もう何もしないで人まかせみたいなの、そういう受け取り方をされるようではございますね。

細川　左様ですね。それはやはり何と申しますか、現在の若い人ということになりますと、いわゆる聞法する青年が激減しました。私は広島大学に毎月行つていますが、二十年前と今ではもうお話を聞こうという学生の数がとても減りました。

学生は宗教というと非常に嫌うんです。一種の恐怖心を持って。何か激烈な勧誘を受けた人がおりましたね。しかし、これは一面のことでありまして、私が思うには、やはり現在、宿善と言いますか、小さい時からお寺に参つたことが一つもない、じいさん・ばあさんに連れられて育てられた

ということがない、また家に仏壇も無く、仏様にお参りしたということもない、そういう宿善が無くなって、それがずーっと出て来て、青年の聞法が減って来た。一方、そういう激烈な勧誘で痛めつけられた者が沢山いて、そういうものが今の問題点ですね。

ですから自力、他力の前に、もう一つやはり宿善というのを涵養するというか、宗教的な情操というものを作って行くというのが非常に大事じゃないかと思えます。私も七十歳を越しまして考えるんですけども、一つには自分自身の未来とか将来のことを考えますと、自分が今日まで生かされて来たことに本当に感謝して、有り難うございました、とお礼を申して行く、そういう所を一つ持って、それが「南無阿弥陀仏」ですね。もう一つは、やはり次の世代というか、次の代を考えて、未来のために木を植えて行くという様な、そういう準備していききたいですね。

金光 私達の未来を生かすために、その無形の木を植えるということは、これは大事な仕事でございますですね。

細川 はい、お寺ではもう現在、年寄りしかお参りしないと申しますけど、その年寄りが非常に大事ですね。その方々が参らなくなったら次はいないわけなんです。その年寄りがひとつ次の代を作ろうと思つたら、やはり自分の息子達はもう大き過ぎるでしょうから、孫がよろしいですね。孫の手を引いてお参りに来られる。それが非常に大きな植林と言います

か、木を育てることになりましようね。本当に願わしいですね。

今では数は少ないですけども聞法している若い人に、「きみはどうして仏法を聞くのかね」と聞いたら、「いえ、小さい時にじいさん・ばあさんに連れられてお寺に参っておりました」とか、そういう人がおります。一方、ある年配の方に対して、「あなたはどうかいった動機で聞かれますか」と聞きましたら、「いや、自分は小さい時に、ばあさんがいつもナマンダブナマンダブと申しておったんです。あのナマンダブツはどいう意味なんだろうかと小さい時から疑問に思っておったんです。ようやく退職して暇が出来たから、聞きに来ました」とか言っておられました。だから「三つ子の魂百まで」と申しますが、やはり大事なことなんですね。

金光 「ナマンダブツ」その一言の中に、すべてが収まっている、そういうことでございますか。

細川 はい、仏教の中心でありますね、如来の全てでございますから、これを本当に少しずつ知らして頂きたいなと思っております。私は、本当に南無阿弥陀仏を頂いたこと、これに越したことはなかった、と思います。

金光 どうもありがとうございました。